

HCG036-02

会場:202

時間:5月24日 11:00-11:15

南アルプスの活動的隆起期に見られる更新統前弧海盆堆積 Pleistocene forearc sedimentation during active uplift of the Japanese South Alps

江川 浩輔^{1*}, 鈴木 清史¹, 高野 修², 古川 稔子³

Kosuke Egawa^{1*}, Kiyofumi Suzuki¹, Osamu Takano², Toshiko Furukawa³

¹産総研メタンハイドレート研究センター, ²石油資源技研, ³JOGMEC

¹MHRC/AIST, ²JAPEX-RC, ³JOGMEC

南アルプス(赤石山脈)は、フィリピン海プレートの沈み込みと伊豆 - 小笠原島弧の衝突に伴って、特に1 Ma 頃から急速に隆起したと考えられている。この時期を境に隆起帯付近の前弧海盆でも堆積環境が大きく変化した。即ち、大規模な海進で特徴づけられる下部更新統の掛川層群が堆積した後、海底扇状地のプログラデーションを伴う中部更新統の小笠層群が下位の掛川層群を不整合に覆って堆積したことが、陸・海域双方における堆積学的研究から明らかにされている(武藤, 1985, 地質雑; Saito and Masuda, 1996, Sedi. Geol.; 高野ほか, 2009, 地雑)。今回、東海沖の三次元地震探査データを詳細に解析した結果(1)掛川層群相当層は堆積後に圧縮による褶曲作用を被り、その褶曲した海底地形の上に小笠層群相当層が不整合に堆積したこと(2)小笠層群相当層の下部および上部シーケンスには北北東方向および北西方向からの古流向を示すセディメントウェーブがそれぞれ卓越することが新たに判明した。これらの点を踏まえて、本研究では、南アルプスの活動的な隆起期における東海沖前弧海盆の堆積作用について考察する。本研究は、メタンハイドレート資源開発研究コンソーシアム(MH21)で実施されたものである。

キーワード: 東海沖, 更新統前弧海盆, 掛川層群, 小笠層群, 褶曲作用, セディメントウェーブ

Keywords: Off Tokai area, Pleistocene forearc basin, Kakegawa Group, Ogasa Group, compressional folding, sediment wave